

シンガポール競馬

吉田 真人

昨年6月、元競馬通にとって、驚きのニュースがもたらされた。「シンガポール・ターフクラブ」が、競馬場の敷地を政府に返還し、2024年10月で競馬の興行をやめると発表したので。政府はこの土地（競馬場と厩舎のある120ヘクタール）を住宅や公園などとして再開発する見通しだ。

イギリスの旧植民地らしく、シンガポール競馬の設立は古く1842年、以来180年以上の長い歴史がある。2012年には、4年連続で売上高が10億シンガポール\$（当時のレートで約700億円）を超え、現役馬数（約1500頭）とシーズンの競走数共に過去最多に達した。

しかしその後、2011年開設のカジノの人気に押された上、コロナ禍で客足が激減、2022年の入場者はピークの約1/4となつてしまった。2016年になってようやくネット投票が合法化されたが、基本的にネット賭け事を嫌う政府の規制でマーケティングが制限され、十分な実績を上げることが出来なかった。ネット投票に十分な投資をし、売上高の回復に成功した日本と大きな違いである。

20年前のシンガポール駐在時は単身赴任であつたこともあり、週末のゴルフのない日にはよく競馬場に行った。

ギャンブル好きの中華系住民で多いに賑わつていた。一般観客席にはエアコンがなく、ただでさえ暑いのに、レースと共に観客席もヒートアップ、大歓声が上がつていた。

そのうちに「ハイビスカス・ルーム」なる特別室があるのを発見、外国人はパスポートの提示と入場料20S\$の支払いで、適切温度に設定された冷房の効いた快適な部屋で観戦できる。

シンガポール航空国際カップが2000年に設立され、世界各国からトップホースが参戦した。2002年には、日本から武豊騎乗のエアトゥーレ参戦し、彼女が3着になるのを目撃することが出来た。

なお今年に入って1月15日に、マカオ政府よりマカオ競馬の本年4月終了・閉鎖が発表された。良好な経営を行っている日本と好対照である。

（2024年1月25日）